田中恭子著

# 『国家と移民——東南アジア華人世界の変容——』

名古屋大学出版会　2002年　vii＋378＋17ページ

田村慶子（たむら けいこ）

## I

本書の著者田中恭子氏は，1973年から82年までシンガポール国立大学で教鞭をとり，その期間の経験とシンガポール社会の変容を，『シンガポールの奇跡——お雇い教師の見た国づくり——』（中公新書 1984年）にまとめた。当時の日本では，急成長するシンガポール経済に関する短い概説書は何冊か出版されていたものの，シンガポールの社会や政治に関する好著はほとんどなく，新書とはいえ田中氏の本は急激な経済成長によって変貌を遂げつつあるシンガポール社会を生き生きと描き，多くの日本人のシンガポール理解に貢献した。田中氏は帰国後，シンガポール華人のアイデンティティ変容に関する研究で精力的な仕事を続け，また同時に，中国の華僑・華人政策を通して，中国と東南アジアの関係史の研究も行ってきた。本書は，この相互補完的な2つのテーマに関して発表してきた8本の論文を大幅に加筆し，さらに新たに書き下ろした3つの章を加えた力作である。

## II

著者が本書のテーマとして掲げるのは，東南アジアという多エスニック・多文化社会の環境，植民地支配，さらに戦後の脱植民地化の大変動の下で，シンガポールの華人コミュニティが変化していく過程および，華人をめぐる諸問題を中国と東南アジア諸国の関係を含めて考察することである。多岐にわたる内容を持つ本書を検討するのは容易ではないが，まず本書の内容を章ごとに簡単に紹介し，冒頭に掲げたテーマに著者がどのような回答を出しているのかを見ていきたい。本書の構成は以下のとおりである。


序　章
第Ｉ部　東南アジア華人世界の変容
　第1章　英領マラヤ，シンガポールの華人移民
　第2章　マラヤ，シンガポールの国家形成と華人
　　——移民の国籍問題——
　第3章　マラヤの華文文学
　　——移民のアイデンティティ変容——
　第4章　シンガポールの言語統合
　第5章　シンガポールの儒教教育
　　——1984～89年——
　第6章　シンガポールの中国政策
　　——1970年代の転換——
　第7章　シンガポール華人の中国観
　　——リー・クアンユーの場合——
第II部　中国の華僑華人政策
　第8章　中国の対外関係と東南アジア華人
　第9章　カンボジア紛争
　　——中国・東南アジア関係の転換——
　第10章　華僑農場の変容
終　章


第Ｉ部は，中国から東南アジアへの大量移民が始まった19世紀から現在に至る華人移民の変容を，マラヤ，マレーシア，シンガポールに限定して，彼らがどのようにホスト国に定着し，その国民として適応していったのかを検討している。第1章は戦前までの移民とその定着過程を歴史的に概述している，第Ｉ部全体の歴史的背景と位置付けられる章である。

第2章では，マレーシアとシンガポールの国家形成期において，華人移民がこれら両国の国籍を取得していく過程を，中国の対応を含めて分析している。華人の国籍問題の核心は彼らの二重国籍である。移民が出身国とホスト国の二重国籍を持つのは珍しい

ことではないが，それが長期間東南アジア諸国と中国との関係における重大な障害となったのは，法的問題というよりも政治的問題であったからである。すなわち，華人の強い中国アイデンティティと冷戦の激化という国際環境にその原因があった。また中国の国籍に対する考え方が不明確であったことも問題をさらに難しくした。マラヤとシンガポールが，1950年代にほとんどの華人に市民権を与えたのは，アイデンティティの現地化を促進したという意味で，賢明な選択であった。

第3章は，華人のなかでも中国アイデンティティが強かったマラヤの華語系華人が，次第にマラヤ・アイデンティティを獲得していく過程を，華文文学（馬華文学）の変遷を通して跡付けている。馬華文学の発展過程から見ると，華人の国家アイデンティティの変容は世代交代が決定的要因で，移民二世以下の世代の作家が育つにつれて中国文学への帰属感は薄れ，それとの違いが強調されるようになり，独自のアイデンティティが主張されるようになった。ただ，独立後の馬華文学発展の道は平坦ではなく，非常事態宣言から1960年代初頭は言論の自由が厳しく抑圧され，シンガポールの分離・独立によって馬華文学は幕を閉じた。現在の華文文学の創作活動の成果は乏しいが，中国，台湾，華人世界とのネットワークによって活性化する可能性はある，と著者は見ている。

第4章では，多言語社会シンガポールの国民統合の一環として推進された教育統合，言語統合の政治過程が分析されている。多言語・多エスニック社会においては，どのエスニック・グループの言語を公用語や教育言語として国民統合を進めるかは，常に政治問題となる。特にシンガポールの場合には，国内外の政治が言語問題に直接反映されるために，政府はかなり強引に英語を中心とする言語統合を進め，1980年代になると，多言語状況は，第一言語の英語と第二言語としての華語，マレー語，タミル語という4つの公用語に収斂された。英語を共通語とする国民統合は成功を収めつつあり，英語を使う国民は各エスニック・グループに均等に増え，家庭言語としても浸透している。もっとも，第二言語のなかでは，華語は，方言駆逐のために行われた華語奨励運動や対中関係の緊密化による経済的利益，政府の中国文化の奨励などによって話し手が増加している。

第5章は，1980年代にシンガポール政府が中国文化維持政策の一環として推進した儒教教育の失敗を通して，シンガポール華人の文化変容のひとつの側面とその要因を考察したものである。宗教教育の一環として始められた儒教教育は，リー首相などの政府指導者が儒教を華人の伝統文化と位置付け，これを継承させる目的で導入した。日本およびアジアNIESの目覚ましい経済発展はこれらの国や地域の儒教的伝統によるものと信じ，シンガポール華人は欧米化によって儒教の伝統を失いつつあると感じたからである。だが，儒教教育は，内容が若い世代へのアピールに欠け，抽象的でエリート哲学志向であったこと，かつ，儒教と競合する仏教やキリスト教が勢力を拡大したために失敗し，廃止された。このプロセスは，複合社会シンガポールの複雑な状況を改めて浮き彫りにしたものと言える。

第6章は，1970年代の東南アジア諸国と中国の国家間関係の調整期に，シンガポールがとった対中国政策を，両国首脳の相互訪問を中心に検討している。シンガポール政府高官として1975年に初訪中したラジャラトナム外相は，経済交流を活発化させ，友好関係推進のためにはシンガポールの「中国性」をも利用した。1976年に訪中したリー首相は，友好関係と経済交流を促進することを第1の目的としながらも，中国とシンガポールが別の国であることを強調した。これは，インドシナ3国の共産化を受けてシンガポールがASEAN結束を最優先し，対中国交樹立を急がないことを表明したものであった。1978年の鄧小平副首相のシンガポール訪問は，ASEAN諸国に対する中越外交競争の一環であったが，シンガポールはやはり両国が別の国であることを強調し，中国の影響を排除していく決意を示した。小国シンガポールにとって，この時期の対中外交は，国際情勢の変化のなかで独立国としての生存，発展を促進する極めて重要な要素であったことを示している。

第7章では，数世代にわたってホスト国に定着した華人が中国をどう見ているかを，初代首相リーを

事例として検討している。彼の中国観は海峡華人を代表している。彼は中国アイデンティティとはほとんど無縁に育ち，政治活動のなかで中国に対する関心を深め，1980年代以降にシンガポールと中国との関係が緊密化してから中国に対する発言が増えている。中国に対して漠然と憧れる傾向があるにしても，彼が最も望んでいるのは中国，香港の安定と繁栄であり，中国の民主化や人権状況の改善ではない。リーの中国観は，彼の生きてきた時代の反映であったが，若い世代の中国に対する親近感は風化しつつあり，両国の交流の拡大が華人に「中国回帰」をもたらすことはない。

第II部第8章では中国側の視点から，建国以来の中国と東南アジア諸国の関係を，華人問題に焦点を当てて分析している。華人問題は，東南アジア各地の共産党支援問題と並んで中国と東南アジア諸国の関係における二大障害のひとつであり，共産党支援問題も華人との関連が障害を大きくした。冷戦による中国と東南アジア諸国の相互不信は，二大障害の認識を実際よりも大きくした。国際的孤立に苦しむ中国は国家間関係の改善を強く望みながら，一方では華人の支持や革命輸出に孤立脱出の望みを託したために，一貫した対外政策，対華人政策を展開できなかった。東南アジア諸国は，中国の脅威に対処するために，国内の華人と中国との関係を絶つことに腐心したのである。1950〜70年代に情勢は大きく変化し，華人は世代交代して現地アイデンティティを確立し，共産党の方は支持基盤を失った。中国の改革開放は，これらの問題が解消された時期とほぼ一致したために，東南アジア華人コミュニティとの交流の復活，拡大が急速に進んだのである。

すでに解決済みと思われていた「華僑問題」が突然噴出する事例を，中越関係の悪化によってベトナム華人が迫害されるという悪循環を通して分析したのが第9章である。中越紛争の主因は，ベトナムが中国の「主要敵」ソ連と同盟を結んだことに対する中国の怒りにある。それによる関係の悪化が，ベトナムの華人迫害を招いた。中国はベトナムの華人迫害を問題にしたが，それは華人保護が第1の目的ではなく，ベトナムを非難することでそのイメージダウンをはかるためであった。カンボジア華人に対する迫害に対して中国が沈黙を守ったのはその傍証である。1978年の華人問題に関する中越会談以降，中国の対外政策において華人が重大な問題となったことはなく，移民後の世代交代によって，中国と華人との関係が変化したことがこの事例からも理解できる。

第10章では，中国が帰国した華僑のために創設した国営農場である華僑農場について，著者の現地調査を基にその歴史的意義と将来を考察している。華僑農場は，他に行き場のない華僑を収容し，その生活を保障してきた。それゆえに中国が華僑華人を優遇していることを海外華人に示し，彼らの中国離れを防止しようとしたのである。冷戦時代には，国内華僑は中国と海外華人を結ぶほとんど唯一の絆として重要であったが，「改革開放」と冷戦の終結によって，中国と海外華人のネットワークが活性化したために国内華僑の重要性が低下し，さらに世代交代によって国内華僑と海外華人の関係が薄れて，華人は中国の親戚が政府にどう扱われているのか，以前ほど関心を持っていない。華僑農場は存在意義を失い，民営化あるいは解体は必至と著者は結んでいる。

## III

移民とは，元来，個人が生活向上を目指す意思によって，国家の枠組みを超えることである。しかし，国家は，移民送り出し国も受け入れ国も，それぞれの国家利益のために彼らを利用，操作しようとする。総人口における華人移民の比率が高ければ高いほど，この華人移民と国家の「せめぎあい」が国内政治と国際関係を支配する。本書第I部は，総人口に占める華人移民の比率が高いマラヤ，マレーシア，シンガポールにおける移民と国家の「せめぎあい」を，国籍法や華文文学，言語問題といった側面から描き出すことに成功している。また，第II部では，その「せめぎあい」の視座を中国に移すことによって，第I部の内容を立体的でより説得力あるものにしている。著者の文体が簡潔で明瞭であることも，読者の理解を進めるのに役立っている。

このような本書の高い価値を左右するものでは全くないが，評者がやや物足りなさを感じた点を少しばかり挙げておきたい。ひとつは，第１章の５「日本占領下の華人コミュニティ」の分析である。著者も述べているとおり，日本軍のエスニック・グループ別の異なった扱いがグループ間の対立を深め，戦後の国民統合を難しくした一方で，同時に移民の現地化を進めたと言われている。しかし，現地化を進めただけでなく，移民二世や三世の政治意識を高め，独立ナショナリズムを醸成した側面もあったのではないだろうか。現地化によるこの独立ナショナリズムの高まりと，戦後の現地化や政治情勢との関連についての記述が少ないのは，少し残念である。

２つめは，第５章の儒教教育の導入と失敗についての分析である。経済発展のために核家族を奨励し，落ちこぼれを是認するような超エリート教育を実施するなどして，伝統的な価値観を失わせたのは政府の政策であった。にもかかわらず，すでに中国においてさえ失われている儒教的な価値観，それも政府が望む倫理観（忍耐，規律，秩序，親孝行，愛国心など）をシンガポール華人に浸透させようとする試みは，当初から受け入れられる土壌がなかったと言えるだろうし，エリート統治を是認するような儒教の考え方に，国民は人民行動党支配の永続化という意図をも感じたのではあるまいか。政府の宗教教育ゆえに国民の間に高まった宗教への関心に終止符を打ったのが，治安維持法（1987年５～６月）による宗教関係者の逮捕であり，宗教調和法（宗教団体の公的もしくは社会的活動を制限する法）であったのは皮肉だったと言わねばなるまい。儒教教育導入は，シンガポール華人と中国的伝統の継承の問題という側面もさることながら，政府与党の支持基盤強化という政治的な側面をも考慮に入れる必要があるようにも思われる。

３つめは，第７章で「シンガポール華人の中国観」としてリー・クアンユーを取り上げ，彼の世代の華人が共有する中国観が分析されているが，著者も述べているとおり，彼は中国との関係が比較的希薄な環境に生まれ育った。彼のように幼い頃から英語教育を受けた海峡華人は，当時の人口のうちほんの一握りであった。では人口の多数を占める華語派華人の中国観はどうだったのであろうか。人民行動党第一世代のなかの華語派華人や，野党の華語派華人の中国観などを対比できれば，さらに興味深い分析になったと思われる。

最後は，第II部についてである。すでに述べたように第II部は第I部と相互補完的になっていて，ゆえに全体をより説得的，立体的なものにしているが，中国の全般的な華僑華人政策のなかで対マラヤ，マレーシア，シンガポールの華人政策はどう位置付けられていたのか，人口比率が高いゆえにとりわけ重要性があったのかどうかなど，これらの国の華人に対するより詳細な政策の分析があれば，さらに明瞭になったかもしれない。

以上のコメントは若干「ないものねだり」であり，本書の高い評価を損ねるものではない。本書は，シンガポールやマレーシア華人のアイデンティティや国民統合とともに中国の華僑華人政策に興味を持つ者が，一度は手にしなければならない一冊であろう。なお，本書は第14回（2002年度）アジア・太平洋賞特別賞を受賞したことも付け加えておきたい。

### 文献リスト

田村慶子 2000.『シンガポールの国家建設――ナショナリズム，エスニシティ，ジェンダー――』明石書店.

（北九州市立大学法学部教授）